

認知症ケアのための指導方法 (2) — 認知症ステージに応じたコミュニケーション —

Training Methods for Care of Dementia Patients (2) : Communication at Different Stages of Dementia

井上 理絵

INOUE Rie

I. はじめに

認知症高齢者は現在約180万人。「厚生労働省高齢者介護研究会報告書」¹⁾によると、2015年には約270万人、2020年には約300万人に増加するという予測を出している。平成19年の社会福祉士及び介護福祉士法改正により、介護福祉士養成教育の見直しが行われ、従来の形態別介護技術に含まれていた内容が、教育内容「認知症の理解」(60時間)として基準が示された。また、法律改正²⁾により介護福祉士の業務の定義規定は「心身の状況に応じた介護」に、義務規定も「個人の尊厳の保持」「認知症等の心身の状況に応じた業務」「サービス提供関係者との連携」「知識・技能の向上」に努めるよう見直しされた。ここにも、「認知症」に伴う新しい動きがある。「認知症の理解」は、これからの教育の中での焦点になってくる教育内容である。

II. 目的

認知症ケアの教育のねらいは、「認知症に関する基礎知識を習得するとともに、認知症のある人の体験や意思表示が困難な特性を理解し、本人のみならず家族を含めた周囲の環境にも配慮した介護の視点を習得する」である。実習場で学生が受け持ちする利用者の認知症の状態はさまざまである。本学では1年次後期に、形態別介護技術で「認知症高齢者」について学ぶ。認知症高齢者を取り巻く状況や認知症により現れる中核症状や原因となる病気の症状及び特徴的な心理・行動状況については学んでいる。しかし、日常生活において「実際に自分自身が支援する」というイメージは形成されにくいと考えられる。実習場において、自分の目の前にいる認知症高齢者に対して「どのような言葉をかければいいのか」、「どのような関わり方をすればいいのか」など戸惑い、不安に感じていることが多く見受けられる。

介護実習Ⅱのねらいである「より深いコミュニケーションを図る」を達成するためには、認知症高齢者の現在の状況を適切に捉え、そのステージに応じた関わりをすることが必要である。今回は、バリデーション手法を活用することで認知症高齢者と関わり

やすくなったとの結果を得た。また、前回、学生が多く使用した手法は、「タッチング」「アイコンタクト」「レミニシング」「リフレージング」であった。そこで、コミュニケーションの基本姿勢である言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションを用いて、認知症高齢者との関わりに特に必要と思われる「昔話をする」「言葉を繰り返す」「目線を合わせる」「身体に触れる」の4点に視点を置き、コミュニケーションを行ったところ、若干の知見が得られたので報告する。

Ⅲ. 方 法

調査対象者：本学の学生1年生58名（男性12名、女性46名）

調査時期：介護実習Ⅱ終了後、2009年3月3日

調査方法：質問紙による集合調査

調査項目：① 基本的属性 性別

② 認知症高齢者との関わりの有無

③ 関わった認知症高齢者の認知症ステージについて

ステージⅠ「認知の混乱」 ステージⅡ「日時、季節の混乱」

ステージⅢ「繰り返し動作」 ステージⅣ「植物状態」

（認知症のステージについては、バリデーションにおける「解決の4つの段階の特徴」を引用）

④ コミュニケーション4つの関わり技法使用の有無

「昔話をする」「言葉を繰り返す」「目線を合わせる」「身体に触れる」

⑤ 認知症高齢者の状態の変化（自由記述）

Ⅳ. 結 果

1. 調査の概要

（1）調査対象学生の性別と施設の種類

対象58名の内、介護実習Ⅱで認知症の利用者とかかわりをもった学生36名を分析対象とした。対象者の特性を表1、実習施設の種別を表2に示した。

（介護実習Ⅱは、利用者を受け持ち、情報収集までをねらいとし実習期間は10日である。）

学生36名の内訳は、男性4名（11%）、女性32名（89%）、平均年齢は18.9歳である。

表1 対象の特性：性別

		人数 (%)
性別	男	4 (11)
	女	32 (89)
	合計	36 (100)

実習施設24ヶ所の種別は、特養14施設 (58%)、老健10施設 (42%) で、特養が多かった。

表2 実習施設：種別

		人数 (%)
種別	特別養護老人ホーム	14 (58)
	介護老人保健施設	10 (42)
	合計	24 (100)

(2) 認知症高齢者の関わり人数

1名の学生が認知症高齢者に関わりコミュニケーション技法を実施した人数については、1人の認知症高齢者に関わり実施した場合が26名 (72%)、2人の人に関わり実施した者は9名 (25%)、3人の人に関わり実施した者は1名 (3%) であった。のべ全部で47名の認知症高齢者に実施した。(表3)

表3 コミュニケーション技法を実施した人数

		のべ人数 (%)
実施人数	1人	26 (55)
	2人	18 (38)
	3人	3 (6)
	合計	47 (100)

(3) 関わりをもった認知症高齢者のステージ分類

コミュニケーション技法を実施した認知症高齢者のステージ分類については、ステージⅠは24名 (51%)、ステージⅡは18名 (38%)、ステージⅢは4名 (9%)、ステージⅣは1名 (2%) であった。(表4)

表4 コミュニケーション技法を実施した認知症高齢者のステージ分類人数

		人数 (%)
ステージ別人数	ステージⅠ	24 (51)
	ステージⅡ	18 (38)
	ステージⅢ	4 (9)
	ステージⅣ	1 (2)
	合計	47 (100)

(4) 4つのコミュニケーション手法のステージ別使用人数

使用した4つのコミュニケーション手法については、ステージIでは「昔話をする」11名(32%)、「目線を合わせる」9名(27%)、「言葉を繰り返す」と「身体に触れる」が7名(21%)であった。

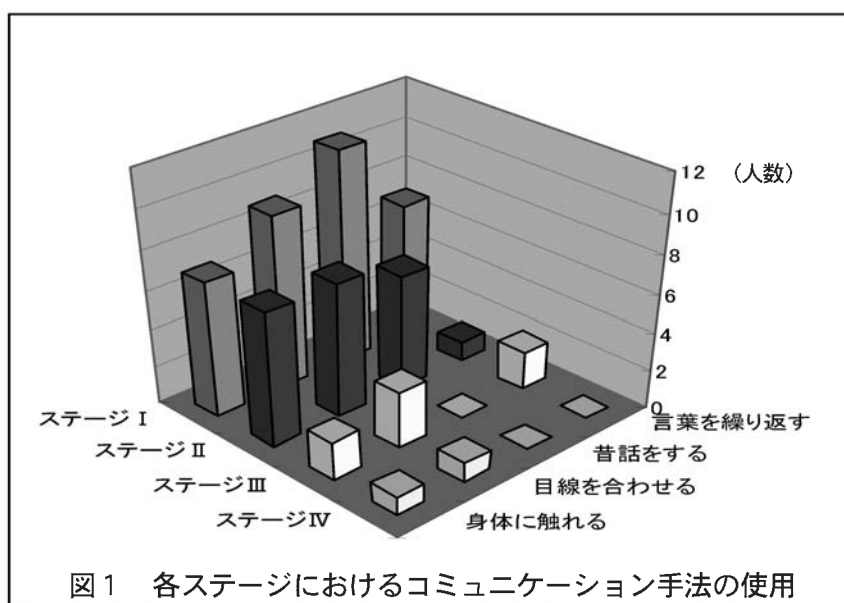
ステージIIでは、一番多かったのが「目線を合わせる」「身体に触れる」で7名(33%)、「昔話をする」6名(29%)、「言葉を繰り返す」1名(5%)

ステージIIIでは、「目線を合わせる」3名(43%)、「言葉を繰り返す」「身体に触れる」が2名(29%)で、「昔話をする」はいなかった。

ステージIVでは、1人の学生が関わりをもち、「目線を合わせる」「身体に触れる」手法を実施した。(表5)

表5 ステージ別使用したコミュニケーション手法人数(重複あり)

	細項目	のべ人数(%)
ステージI (n=34)	言葉を繰り返す	7(21)
	昔話をする	11(32)
	目線を合わせる	9(27)
	身体に触れる	7(21)
ステージII (n=21)	言葉を繰り返す	1(5)
	昔話をする	6(29)
	目線を合わせる	7(33)
	身体に触れる	7(33)
ステージIII (n=9)	言葉を繰り返す	2(29)
	昔話をする	0(0)
	目線を合わせる	3(43)
	身体に触れる	2(29)
ステージIV (n=2)	言葉を繰り返す	0(0)
	昔話をする	0(0)
	目線を合わせる	1(50)
	身体に触れる	1(50)



(5) コミュニケーション手法による認知症高齢者の変化

関わりを持った認知症高齢者の状態の変化については、意味内容別に分類した。(主なものを掲載)

「言葉を繰り返す」

使用前	使用后
遠くを見て話をしている	横に座り、話されていることを繰り返したら、目を見てくれるようになった
何の話をしていたか忘れてしまい、少し苦しそうにしておられた	話の内容を繰り返して話したら、「そう」と言って続きを話され、新たな話もして下さった

「昔話をする」

使用前	使用后
少し、しょぼんとして自分の指輪を見ていたとき、昔の話を聴きながら旦那さんとの話をした	笑顔になってまた指輪を見て、話を続けてしてください
自分が隣に座ろうとすると嫌な顔をされたので、無理矢理だったが昔の話を聞いた	機嫌が直り、笑顔が見られ、昔あったことをたくさん話してください
「昔住んでいた場所が懐かしい」と言われたので、その地域の昔あった建物について知っていることを話した	「散歩している気分になったわ ありがとう」と言われ、涙ぐまれた

「視線を合わせる」

使用前	使用后
1人で寂しそうでつまらなそうにしているとき、目を合わせて、手を握り近くで歌を歌う	手をさすってくれ、笑顔で「かわいい」と言ってくれた
椅子に座ってぼーっとしているときに、前に行き目を見て手を触れてみた	「暖かい手」と言って、握ってくださり、笑顔になられた
遠くを見つめていて、よくわからない言葉を「むにゃむにゃ」言われている時に、名前を呼び、肩に触れて目をじっと見た	「ああ〜」「あれ〜」と言ってにっこりされたり、さまざまな表情をされる

「身体に触れる」

使用前	使用后
泣いておられたときに、背中をさすった	少しすると泣き止まれ、落ち着かれた
無表情なときに、笑顔で接し、両手で手を握った	「手暖かいね」と笑顔で言われ、ギュッと握られ、懐かしそうに話をされた
「もうダメだ」としんみりされている方の手を握った	笑顔を返された

V. 考察

認知症高齢者は、その特有の記憶障害や見当識障害、判断力の障害のためにさまざまな不安感、緊張感、イライラ感、興奮等を体験している。日常生活の中でそのような心理状態にある認知症高齢者と関わるには、その方の現在の心理状況を的確にとらえ、どのように関わるのが効果的であるのかを判断していかなければならない。今回の調査から、学生たちは、認知症高齢者と関わることに不安を感じながらも、自分の目の前にいる認知症高齢者に対してこの4つの手法をどのような形で使用すれば、心穏やかに自分とコミュニケーションをとることができるのかを考えて実施していた。会話が通じる方には、言語的コミュニケーション手法である「言葉を繰り返す」「昔話をする」を使用し、言葉では通じにくい方には、非言語的コミュニケーション「目線を合わせる」「身体に触れる」を使用していた。また、1つの技法を使用するだけでなく、いくつかの技法を組み合わせることで、認知症高齢者の笑顔を引き出し、安心してもらえる時間づくりをしていた。

関わりの方の前後で認知症高齢者の状態の変化については、ほとんどの学生が、よい結果が現れた事実を記載していた。ある学生は、「ここで使ってみたらよいかも说不定。とその場で思って行動した。利用者の様子をよく見て、どうすれば気分良くなってもらえるかを考えて、その場に応じて行うことが大切だと思った。しかし、雰囲気を読むのが難しかった」と記述していた。今向かい合っている利用者の現状に合わせた関わりを持ち、少しでもよりよい関係が築けるように考えている様子が伺える。また、学生の中には、「話が止まり、沈黙が続く時に、目線を合わせたり、身体に触れてみたりしたが、利用者に嫌がられてしまい、使うタイミングが難しかった」と記述している者もいた。「雰囲気を読む」「タイミングを掴む」ことは、人生経験の浅い学生には困難なことと考えられる。自分自身の感覚系に働きかけ、反応を観察して実施することは確かに難しい。しかし、コミュニケーション手段が確立するためには、認知症高齢者をしっかり観察することが大切であり、その方の認知症ステージを理解し、その時の心理状態に合った関わりをしていくことが重要である。認知症高齢者とのコミュニケーション手段が確立されれば、介護過程が展開しやすくなり、介護実習での成功体験に繋がる。より満足度の高い介護実習にするためにも、認知症高齢者に対する理解を深めることは不可欠である。

今回は、コミュニケーション手法4つをとおして、各々の認知症ステージと関連させ、認知症高齢者理解に繋ぐことを目的としたが、今後の課題として、

- ① 利用者に大きな状態の変化が見られたものについて、好事例・失敗事例共に、認知症高齢者ステージとの関わり等を分析し、学生がそれらの体験を共有し、検討・考察し合える場の設定
- ② 利用者の心理状態に合わせた対応方法の効果的な技法の組み合わせの検討がみえてきた。今後認知症ケアを指導する上での基礎資料として、これからも研究を続けていきたい。

VI. 引用・参考文献

- 1) 厚生労働者高齢者介護研究会 「2015年の高齢者介護」～高齢者の尊厳を支えるケアの確率に向けて～ 2003年
- 2) 「介護保険法及び老人福祉法の一部を改正する法律」 平成20年5月28日法律第42号
- 3) 日本認知症ケア学会 「認知症ケア標準テキスト 改訂・認知症ケアの基礎」株式会社ワールドプランニング 2007年
- 4) Naomi Feil 「バリデーション 認知症の人との超コミュニケーション法」 筒井書房 2001年
- 5) 長谷川和夫編著 「認知症の理解」 建帛社 2008年
- 6) 中村祐子編著 「認知症の理解と介護」 メヂカルフレンド社 2009年
- 7) クリスティーン・ブライデン著 「私は誰になっていくの？」クリエイツかもがわ 2003年
- 8) スー・ベンソン編 「パーソン・センタード・ケア」クリエイツかもがわ 2005年
(平成21年10月30日受付、平成21年11月9日受理)

